【トップインタビュー】　◇地域猫、まずは不妊去勢手術を＝佐上邦久・どうぶつ基金理事長

18/03/05 08:30 NG025

佐上邦久・どうぶつ基金理事長

猫はペットとして愛される一方、飼い主がいない場合は悪臭や騒音を引き起こす「害獣」として嫌われるケースも少なくない。環境省はトラブル解決策の一つとして、野良猫に不妊去勢手術を施して一代限り地域で見守る「地域猫」を推進しているが、実践は難しいのが実情だ。公益財団法人どうぶつ基金（兵庫県芦屋市）の佐上邦久理事長（さがみ・くにひさ＝５８）は、「まず不妊去勢手術を行うことが問題の解決につながる」とアドバイスする。

どうぶつ基金は２０１２年から、「さくらねこＴＮＲ（ＴＮＲ先行型地域猫活動）」という野良猫保護活動を全国に広げてきた。ＴＮＲは飼い主のいない猫を捕獲し（Ｔｒａｐ）、不妊去勢手術を施し（Ｎｅｕｔｅｒ）、捕まえた場所に戻す（Ｒｅｔｕｒｎ）活動のことだ。

手術に併せて耳にＶ字の切れ込みを入れた猫は、その形が桜の花びらに似ていることから「さくらねこ」と呼ばれる。同基金は手術費を全額支援する形で、自治体や団体、個人と協力し、１７年度だけで２万匹以上に手術を施している。

「地域猫活動は野良猫に対する苦情の解決手段として素晴らしいアイデア」と評価するが、野良猫に不満を持つ住民と好意的な住民とで対立が起きていると導入は非常に難しい。近年では自治会の組織率も低迷し、合意を取り付けようにも協議する場がないことさえある。

大事なのは「地域猫活動を始めるよりも問題を解決すること」と強調。地域猫導入の合意前であっても、ＴＮＲを先行して行うよう勧めている。

自治体に寄せられる問題は大きく三つに分けられる。一つ目は猫の数が増えすぎること。猫は繁殖力が強く、１年間に３回出産して１回に６匹の子猫を産むと言われている。成長も早く、１匹の母猫から１年で子猫、孫猫を合わせて５０匹以上まで増えてしまうこともある。

二つ目はふん尿。特にオスの尿はマーキングで縄張りを示すために臭いが強く、１匹がマーキングすると他のオスが同じ場所に重ねて尿をするので臭いがよりきつくなってしまう。三つ目は夜中の盛り声やオス同士のケンカによる騒音だ。

去勢手術をすることでオスの尿の臭いはかなり軽減され、マーキングもほぼなくなる。性格も非常に穏やかになるので、苦情が出にくい状況にできる。「手術を施せば問題はほぼ全て解決する」と訴える。

自治体と協力する際は、不妊去勢手術とワクチン、ノミよけの薬代の費用をどうぶつ基金が全額負担している。自治体には手間がかかる捕獲と、手術後に元に戻す業務を担ってもらっており、「協業の理想的な姿」だと自負する。

自治体は各地域のボランティアをまとめ上げることができ、民間と比べて信頼関係を構築しやすいので、依頼があればほぼ１００％協力している。活動の財源は寄付や基金の運用益、啓発のためのＴ

シャツやカレンダーを売った収益などだ。

　行政の努力もあって、野良猫の数も殺処分の件数も近年減りつつある。「２０年までに殺処分ゼロを実現したい」と力を込める。

　殺処分を減らす一番の方法は保健所での引き取り拒否だ。猫の引き取り数が減れば、殺処分の数も当然減る。しかし、メス猫の引き取りも拒否することになるので、出産を繰り返して増えてしまう。「自治体は引き取りを拒否する際、手術を施してから元の場所に戻す制度を作ってほしい」と訴える。

（津支局・横山晃嗣）（了）（２０１８年３月５日配信）

インタビュー一覧はこちら

※本印刷物は時事通信社 iJAMPサービスから印刷されました。

Copyright JIJI PRESS Ltd. All Rights Reserved.